The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	堀一人さんからの提題
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

堀　一人さんからの提題

府立刀根山高校の堀です。刀根山高校というのは、殆どが進学を希望しますが、私学中心です。就職する子も10人ほど、専門学校、看護学校に行く子も入れて40人ぐらいですか。卒業する子の殆どは社会のよき労働者になっていくような、そんな学校です。そのなかで、今年は僕は４単位の現代社会を３クラス、あと２単位、情報という授業を教えているんですが、週４回倫理の授業ができる。本当は政治経済的なことも含めてやるんですが、まあ倫理を中心に現代の社会を考えるということで、今年は週に４回非常にゆっくりとした授業を、それも３年生でやってまいりました。

当然公立高校で異動がありますから、僕はここで３校めなんですが、いろいろ見てきています。特に最近大きく状況が変わってきているのが、自分自身に対するこだわりとか自意識が強い子が多いんです。ただ人より遅れているんじゃないかと気にして内向的になったり、個性的に生きたいと思っていても、こちらから見るとワンパターン化している子が多いんです。まず自分を大事にしたいとか、自己実現ということは根底にありますが、自分に閉じ込もったり、急にキレたり、コミュニケーションがとれない。自分のことを分かってほしいと思うんですが、その距離感がとりにくいようです。そのために、人間関係を自分から広げていこうというようなことも苦手で、社会的なものにつながるきっかけが狭くなっているし、幼く感じます。高校３年が、昔の高校１年を教えているような実感になっています。

僕の問題意識は、そういう子供たちの個人的な意識をどういうふうに社会的なものにつなげていくか、ということが課題だと考えています。

以前「おかわりクラブ」というのをやっていて、ここでお話させていただきました。今年で終えてしまったんですが、５年くらい前に、高校中退者がいっぱい出て、中退っていうのは非常に屈辱であったり失敗であったりという受けとめがあって、中退者はそこから社会へ積極的に前へ出てこれないんです。それで人生何度でもおかわりできます、という発信をしてですね、中退してもまだまだ道はいっぱいあるんだよ、っていうのを６年くらい前に、そういうことをやり始めました。それが時代が早く進みすぎて、今はそんなん当たり前になってきて、おかわりクラブも若干今年から形態を変えようと思っています。

高校までで18年ですが、人生考えるとそ

れから60年位生きなきゃならない。そうすると、高校の問題だけで考えるより、社会に出たときに自分はどんな風に生きていくかとか、それを自分自身で選べるとか、自分自身で決断できる、というだけでいいんじゃないか。その時々で自分で判断していく力を付けることが、高校の一番の課題なんだ、ということです。もちろん学力もその１つです。何かしたいときに数学の力がないからその道が閉じられているということがあるわけで、そういう意味では必要な力はきりがないですが、少なくとも倫理ではどういうところかということが問題になってきます。

指導要領の話が大塚先生の話にも出てきましたが、それで言われていることは「現代の諸問題を具体的に考察させて自己の確立を促す」また「他者とともに生きる自己のあり方」というのがあって、そのことが、「社会に出たとき、どんなふうに生きていくのかを自分自身で判断できること」という問題をはっきりさせているんじゃないかと思います。今僕は進路部長をやっているということもあるんですが、この５年ぐらい職業という問題が自分の問題意識の大きな位置を占めています。自分自身がどんなふうに生きているかということを、自分自身で判断できる、そのためには転職も可だし、どこへ行くのも可だ、そういうなかで自分１人じゃなくて社会的な意味も含めて決断できるような生徒、自分の人生をデザインできるような学生をつくることが、倫理、公民科に求められていることなんじゃないか、というのが僕の基本になっています。

その出発点は生徒それぞれが自分自身に向かい合うこと、あるいは自分が考えたりすることが楽しいことなんだ、と実感できることが第一です。２番目は自分の考えていることを表現して他人の意見に耳を傾けるコミュニケーション能力をつける。これは一番大きいんじゃないか、聞く、話す、ということです。

最初は、立ち上がって自分の意見を堂々と言える子なんていません。授業終わったら、５分から10分ぐらい時間を与えて、カードを作らせるんです。１学期は「自分とは何か」というテーマを決めて、心理学的な話からギリシャ思想、キリスト教から基本的なことをやるんです。例えば「アイデンティティ」と言う言葉を教えて、今自分のアイデンティティに近い思想とか、何になりたいかとか、自分はどこにいるか、とか１時間毎にテーマを決めて小さなカードを書くわけです。自分の意見を書く欄と質問を書く欄と、それを毎回授業の終わる前、７分から10分の時間を与えて書いてもらって集めます。次の時間までに、というと明日までにということですが、それを全部読みまして、ひとクラス40人分、縮小コピーかけて20人づつ切り貼りし裏表印刷します。次の時間渡す、それについて少しコメントすることを毎回繰り返します。こっちは大変ですが、それをやるとみんな必死になって読みます。初めのうちは名前を載せませんが、「そのうち名前を載せるので、絶対載せてほしくないなら名前を載せてほしくないと書け」、と言うんですが、それも１学期間でしだいになくなってきます。だいたい筆跡で誰が書いたか判ってきて

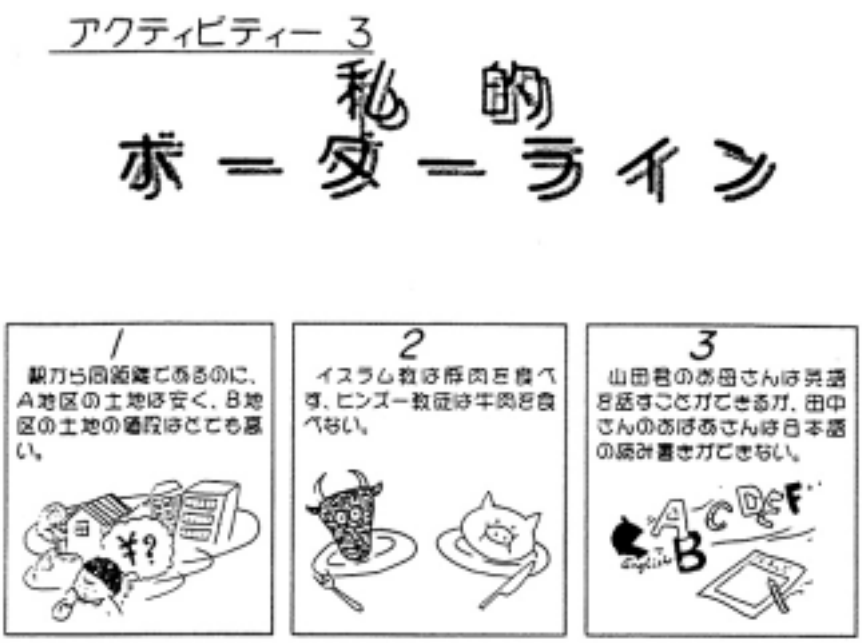
しまうんですね。そうすると自分の考えていることとみんな違うなあ、ということが判ってきます。

１学期間は僕がしゃべって、感想を書かせて、とそういう授業をやります。技術的な問題なんですが、２学期になって議論できたらグループで議論をしていきます。大塚先生の言われるように高校現場では技術のウェイトって結構高いんです。技術の裏づけのない授業は生徒から聞いてもらえないんです。

３つ目、そこまでいって最後に、自分の持っていることも大切にしながら他者への共感をどう作れるか、他者への共感、他者を想像する能力をどうつけられるか、ということです。そして自分の感じたものが社会的にどういう位置にあるか、他の人の意見と比べあいながら、社会的な位置づけが想像できるような、そういうところに広げていけないかなあ、という気がします。３つ目の目的はそれです。

「民主社会の倫理」ということで８時間した授業を例にあげますと、これは最初は５～６人のグループで、グループは１回ごとに変えますが、話し合いました。

この10年ぐらい僕は同和教育にも関わっていまして、そのために作った「アクティビティー３・私的ボーダーライン」という教材があります。20の項目について、グループで「許せる違い」か「許せない違い」かということを話し合います。面白いのは、「バレンタインデーに木村君はチョコレートをたくさん貰ったが、中井君は１つも貰わなかった」、これはたいていの子「許せる」と言うんですが、１人女の子が立ち上がって「絶対許せない、かわいそうだ」と言うんです。「そんなもん、しょうがないやないか」とか「好みでみんなあげているの、嫌な人間にあげても」とかみんな言うんですが、「いや、これは違う。１つも貰えなかったらだめだ」と言うんです。これはある意味では「結果の不平等をどうするか」という問題が出てくるんですね。出発点としての平等があっても、結果としての不平等をどうするか、ということです。いろいろ意見は出ます、もめるものはもめますね。「パンダはかわいいが、蛇には石をぶつける」こういうのはもめます。「じゃあ蛇は殺してもいいんか」とか「ゴキブリは殺してもいいが、自然破壊はあかん」とか、ね。これを導入に使っています。１時間意見を出し合ったところで２時間目に「社会契約論」というのを教えて、人権意識、自然権というものを教えます。３時間



目に一応現代社会の授業なので憲法に結実したことを押さえまして、４時間目に「自由」について考える。グループで話し合って自由をランキングしよう、ということをやります。その後５時間目に「自由」についての考え方の歴史的なこと、ミルの自由論とフロムの自由論を中心に説明します。６限目に、平等とか公平ということをどう考えるかを、ロールズを使って説明します。

こういうふうに考えていくと、自分の身の周りで人権侵害とか「おかしい」と思うことを発見できるのか、ということで最後の「アクティビティー１・私の町再発見」で人権上問題になることはどこにあるか、考えます。こんなふうにして身の周りの自由とか平等という観念がどんなふうになっているのか、最後のまとめとして人権侵害を許さないために、どうしたらいいのか、どんな取り組みがあるのか、という話をします。

なるべく実感的なところから具体的なところへ、自分の実際の行動の中に行けるような授業にしたいな、と考えています。一方的な授業ではなく、教師と生徒の相互作用、あるいは生徒同士の議論、共同作業、調べることなどの機会を設定することが大切なんじゃないかと思っています。哲学としてはどうかわかりませんが、実際の問題に引きつけて考えていくということです。

ここまでは公式の話で、正直なところ、今、高校の教師は非常にしんどい状況にあります。昔は教師であるだけで尊敬されましたが、今は教師であるという条件では尊敬されません。生徒の気持ちを分かってくれるといっても、分かるだけでは尊敬されません。結局、生徒に見栄をはらないというか、自分に見栄がないからそうすることができる。

生徒と消耗戦をやっているような感じがするんですよね、でもやらなきゃいけないからやろうとするんですが、良心的な、というか一所懸命やっている教師は疲れます。

最後は愚痴になってしまいましたが、こういう現状です。あとは議論で続けたいと思います。（ほりかずと　当時大阪府立刀根山高校教員、現在大阪教育大学附属天王寺高校教員）

ディスカッション

司会：それでは私たちの教育グループの方で３本柱ということで立てた３本目なんですが、いままでお話してきたことを踏まえて「哲学教育」「倫理教育」の目標、あるいは「自分で考えることの意義」とはどういったことなのか、総括的に議論できればと思います。